

## 不思議現象を信じる心理的背景<sup>1)</sup>

筑波大学心理学系 松井 豊

The Psychological background of belief in mysterious phenomena

Yutaka Matsui (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

One thousand and twenty six citizens, residing in the metropolitan area in Japan, took part in a random-sampling survey, regarding their belief in mysterious phenomena, such as paranormal phenomena and fortune telling. Belief in mysterious phenomena differed according to gender and generation. Respondents in their 20s-30s were more inclined to believe in mysterious phenomena, with this trend being even stronger for those with higher neuroticism and motivation to acquire praise. Respondents in their 50s-60s only believed in traditional religious phenomena, and their beliefs were almost unaffected by personality traits.

**Key words:** paranormal phenomena, belief, religion

本研究では首都圏在住成人の無作為抽出調査データに基づいて、科学では非合理的と判断されている不思議現象<sup>2)</sup>の存在を信じる人の、人口統計学的な基本属性や心理的特性の特徴を分析する。

### 不思議現象を信じる日本人の増加

現代日本では、「霊」や「占い」や「超能力」などの、科学では解明されていない不思議現象を信じる人が増加している。NHK世論調査部(1984)が1981年に行った調査によれば、不思議現象を信じる人は若い層に多く、「死後の霊魂」や「占い」への関心は、若い世代に高かった。1978年と1984年に行われた世論調査の結果を分析した上村(1985)によれば、1980年を挟んだ6年間の間に、「予言」や「心霊現象」などの超自然現象を信じる比率が増加し、若い世代だけでなく、広い範囲の世代層がオカルト的な現象を信じるように変化した。

宗教意識に関する世論調査の結果を分析したNHK世論調査部(2000)によれば、「お守り・お札の力」や「あの世」などの「霊的なことがら」を信じている比率は、1970年代後半から80年代前半にかけて、若年層において急激に増えており、高齢層では逆に漸減する傾向がみられた。

日本人母集団からの無作為抽出標本を用いたこれらの調査報告からは、1980年頃を境にして、若い層を中心に不思議現象を信じる人が急増していることが確認される。ただし、これらの現象をなぜ信じるようになったのかという社会心理的背景に関しては、上記の報告でも思弁的な考察を下すにとどまっ

1) 本報告は朝日新聞社総合研究センター・マーケティング室によって行われた「新AORプロジェクト」(研究代表: 林知己夫)に参画し、得られた研究成果の一部を発表するものである。同プロジェクトは、林知己夫氏のほか、川浦康至氏(横浜市立大学)と土田昭司氏(関西大学)との共同研究である。データを使用させていただいた共同研究者の方々に感謝する。ただし、本研究の分析・考察の責任は、筆者にある。

2) これらの現象は、超自然現象(supernatural phenomena)や超常現象(paranormal phenomena; 美甘・大倉・宮司(1992)など)やオカルト(occult), 俗信(奥田・伊藤・河野・福地, 1991など)などと呼ばれており、評論家や研究者によって定義が微妙に異なっている。本研究では、菊池・谷口・宮元(1995)にそって、「不思議現象」の用語を用い、Table 1に示す12種の現象をもって操作的定義とする(これらを一括して扱う根拠は、松井, 1997a, 1998を参照)。本研究の文献紹介では、原論文では異なる表記がとられていても、この操作的定義に対応する類似現象を扱っている場合には、不思議現象を分析した研究と位置づけて引用している。

ている。

### 不思議現象の信奉の社会心理的背景に関する評論

不思議現象を信じる社会心理的背景については、各種の評論が発表されている。

たとえば、「てかざし」をする若者に取材した柿田・藤田(1992)は、これらに関わる青年が暖かい家庭を求め、素直でない自分に悩み、社会の不正を悲しみ、環境問題に焦りをおぼえていると報告している。憑依妄想の研究者である高橋(1993)は、「死」の現実感のない現代では、得体の知れない不安が蔓延し、この不安感が宗教や霊への関心を引き起こしていると考察している。怪談や心霊現象に対して啓発活動を展開していた中村希明(1993)は、心霊現象ブームの背後に、核保有などによる大衆の不安感と現代科学へのアンチテーゼがあると評論している。

宗教社会学の立場から青年の宗教事象を分析した井上(1999)は、オカルトへの関心は日本人が引きずってきた基層信仰的なものの再生にすぎない面があると指摘し、超常現象などに関心を持つ人は宗教に関して断片的な知識をランダムに受け入れているため、信念構造が不安定であると論じている。宗教心理学者の金児(1997)は、若者にみられる霊魂・霊界志向の背景に、管理社会からの脱出願望と合理性への懐疑があると捉えている。さらに、若者が示す私生活上の事象への関心を優先させる態度(私化)は、個別的偶然的な不幸に重みを加えるために、この偶然性を説明する意味体系として、超自然現象や非合理現象を信じる態度が生まれると考察している。

田丸・今井(1989)は、青年が占いを好む理由に関する評論を整理し、占いを好む要因を下記の5種にまとめている。管理社会による自力更生力の欠如、暗い未来への不安、科学技術で解明しきれないものへの憧憬と関心、マスコミによるファッション化、自己定位への願いだである。

### 不思議現象の信奉に関する心理学的研究

不思議現象への信奉(belief)を実証的に検討した心理学研究においては、不安との関係を中心に分析が行われている。

汐見(1988)は、福島県・東京都・福岡県の小学生から高校生891名を対象にして調査を行い、日常生活で不満を感じていたり、イライラしている青少年は非合理的な信念を持ちやすいと報告している。田丸・今井(1989)は、鳥取県内の高校生を対象に占いに関する意識や行動の調査を行い、占いへの信頼と、人間関係の悩みや不安や顕在性不安との間に、相関を見いだしている。戸田・南(1993)は、中学生

を対象にして占いと自己効力感との関連を分析し、魅力ある異性にさまざまな働きかけをする生徒ほど、占いをよくすると報告している。

岡本(1988)は、103組の大学生とその親に調査を行い、災難不幸が多いと、厄払いや占い師への訪問が多くなると報告している。金児(1997)は、大学生312名とその両親395名を対象にした調査を行い、死後の世界の存在を信じるなどの霊魂観念が、両親より子どもに、男性より女性に、それぞれ濃厚であると報告している。

美甘・大倉・宮司(1992)はTobacyck(unpub.)の改訂版 Paranormal Belief Scale(PBS)を翻訳して、大学生242名に調査を行い、自己愛傾向などとの関連を分析している。その結果、超常現象を体験していない層では、超常現象を信じている人ほど、注目願望が強いことを明らかにしている。中島・佐藤・渡邊(1993)は、大学生を対象にして、「不思議な出来事」100項目の信奉度を調査し、日本版PBSを構成している。YG性格検査の得点との相関を見ると、迷信の信奉度が回帰性傾向と有意な相関を示していた。

伊藤(1996)は、大学生・短期大学生・専修学校生585名を対象にした調査を行い、「非科学」信奉尺度を作成している。分析の結果、「非科学」に対する興味や信念と「科学」に対する興味や信念は独立して存在していた。また、超自然現象への興味は男性が強いが、同じ現象への信念は女性が強くなっていた。

中村雅彦(1998)は大学生234名のYG性格検査の一部を使用した調査結果から、不思議現象の体験をした人ほど、思考的内向で客観性欠如傾向がみられると報告している。また、超心理学の授業を受講している学生の規範意識を分析し、オカルトに懐疑的な受講生は、上下関係や伝統・慣習、儀礼などを尊重するが、社会的関心が薄く、私生活の楽しみを重視すると報告している。

### 無作為抽出標本に基づく分析

以上の諸研究は、有意抽出された回答者の意識を分析しているが、松井(1997a, 1998)は、無作為抽出標本に基づき、不思議現象を信じる人の特徴を分析している。

松井(1997a)は、首都50キロ圏に在住する高校生から無作為2段階抽出によって抽出された614名について、不思議現象信奉の心理的背景を分析した。Table 1に示す12種の不思議現象の信奉を数量化理論第3類(以下、Ⅲ類と略記する)によって解析した結果、第Ⅰ軸には全ての現象を信じる度合いが抽出された。第Ⅱ軸と第Ⅲ軸のカテゴリスコアの布置から、12種の現象は占い系(「占い」、「手相」、「おまじ

Table 1 不思議現象の信奉の構造<sup>a)</sup>  
(数量化Ⅲ類のカテゴリースコア)

項目内容		成分1	成分2	成分3
UFO	×	-0.51	-0.62	0.41
	○	1.79	2.21	-1.45
占 い	×	-0.36	0.53	0.37
	○	2.37	-3.55	-2.45
霊	×	-0.78	-0.37	0.21
	○	2.30	1.09	-0.63
超能力	×	-0.49	-0.45	0.27
	○	2.70	2.44	-1.46
手 相	×	-0.31	0.62	0.48
	○	1.77	-3.49	-2.72
たたり	×	-0.34	0.05	-0.07
	○	3.58	-0.55	0.71
神仏の存在	×	-0.45	0.06	-1.13
	○	1.58	-0.22	4.01
前世の存在	×	-0.51	-0.24	-0.18
	○	3.02	1.40	1.09
おまじない	×	-0.19	0.26	-0.09
	○	3.89	-5.21	1.76
血液型 性格判断	×	-0.32	0.66	0.52
	○	0.99	-2.04	-1.61
神社などの お守り	×	-0.28	0.51	-0.76
	○	1.40	-2.53	3.78
死後の世界	×	-0.51	-0.34	-0.06
	○	3.28	2.21	0.38
固有値		0.28	0.14	0.10

<sup>a)</sup>○は「選択」、×は「非選択」である。

ない)、「血液型性格判断」、これらは女子が多く信じていた)、疑似科学系(「超能力」、「UFO」、これらは男子が多く信じていた)、旧来宗教系(「神社などのお守り」、「神仏の存在」、「たたり」)、第4グループ(「霊」、「死後の世界」、「前世の存在」)の4種に分類された。

さらに、不思議現象を信じている女子は、宗教に関心を持ち、科学に限界があると感じており、周囲への同調性が高かった。一方、不思議現象を信じる男子は、女子と同様に宗教への関心と科学限界感が強かったが、女子とは異なり、学校には適応しているが、退学や家出などの問題行動をしたいという気持ち(問題行動意欲)が強いという特徴を示した。松井(1997a)は、不思議現象を信じる男子高校生の内面的な問題に対する配慮の必要性を指摘している。

同じ設問を用いて松井(1998)は、首都圏に在住する18歳から69歳の成人男女を2段無作為抽出して得られた意識調査の回答を分析している。松井(1997a)と同じⅢ類による解析の結果(Table 1)、I軸には不思議現象を信じる度合いが抽出され、II軸Ⅲ軸の

布置は松井(1997a)と同じ4種のグループの存在を示した。また、I軸のサンプルスコアの分析から、若い層ほど不思議現象を信じる気持ちが強いことが明らかになった。ただし、松井(1998)は、不思議現象を信じる心理的背景に関しては、詳細な分析を行っていない。

## 目的と仮説

松井(1998)が基にしたデータでは、性・年齢以外の人口統計学的基本属性や性格特性も測定しており、これらの変数と不思議現象を信じる気持ち(信奉)との関連を分析すれば、不思議現象を信じる成人の心理的背景が解明できると予想される。有意抽出された生徒や学生データの分析ではなく、無作為抽出された成人データを分析することは、ともすれば社会評論レベルの議論や思いこみの応酬になりやすい不思議現象への取り組みに対して、科学的な基礎資料を提供しうるものと期待される。

本報告では、松井(1998)のデータを再解析して、不思議現象を信じる人々の基本属性や性格的な特徴を分析する。分析は、Table 1に示す不思議現象を信じる度合いと、性・年齢、学歴などの人口統計的属性や、基本的な性格特性(Big5)や公的自意識に関する対人的欲求(賞賛獲得欲求、拒否回避欲求)、援助に関わる規範意識との関連を分析する。具体的な仮説は以下の通りである。

NHK世論調査部(1984)や松井(1997a)の結果から、信じる不思議現象は、性・年齢によって異なると予想される。そこで、「仮説1：性や年代によって信じる不思議現象が異なる」を設定した。

高学歴者は一般に科学教育を長く受けているため、科学限界感(松井, 1997a)が弱いと推定される。そこで、「仮説2：高学歴者ほど、不思議現象を信じない」を設定した。

松井(1997a)が高校生において発見した不思議現象と性格に関する性差は、成人においても確認されると予想される。そこで、「仮説3：不思議現象を信じる度合いは、基本的性格や公的自意識に関わる対人的欲求と関連し、その関連は女性より男性において顕著である」を設けた。

困った人に援助をするべきだという援助に関する規範意識や、他の人には関わらない方が良いという非関与規範は、社会的関心や私生活主義と関連している。社会的関心が不思議現象の信奉と結びつくという中村(1998)の知見に基づき、「仮説4：援助に関する規範意識は、不思議現象を信じる度合いと関連する」を設定した。

## 方 法

### 対 象 者

東京駅を中心とした50キロ圏内の市区町村(圏境界上の市区町村に関しては、圏内に含まれる町丁村字の推定人口が同市区町村の過半数を占める場合に圏内とした)に住む18歳から69歳までの男女個人。標本抽出は、2段無作為抽出法によって行った。50キロ圏内の市区町村に含まれる16,542町丁村字を人口統計表の記載順に理論上一列に並べて、総人口ベースで累積総人口表を作成した。この人口表から147,000人間隔で、該当者が在住する200地点を抽出した(第1段地点抽出)。総人口表の番号に基づいて、各地点の住民基本台帳から、最初に出現する該当年齢者を決定した後、30人間隔で条件該当者を8名ずつ抽出した(第2段対象者抽出)。抽出人数は1600人で、有効回収数は1026であった(有効回収率64.1%)。

### 調査項目

質問紙は「情報行動に関する調査」として多くの項目を含んでいたが、本報告で分析対象とするのは、下記の項目群である。

**不思議現象の信奉** Table 1 にあげる12種の現象の内、「存在を信じている」ものを、多重回答法で尋ねた。選択肢には「この中で信じているものは一つもない」を加えてあるが、本報告では分析対象としていない。選択肢は松井(1997a)と同一である。

**人口統計学的属性** 性・年齢、学歴などを尋ねた。

**基本的性格** 和田(1996)が開発した「性格特性を用いた Big Five 尺度」から、5尺度(外向性、神経症傾向、開放性、誠実性、調和性)の代表項目を6項目<sup>3)</sup>ずつ選び、「あてはまる」「まああてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の4件法で回答を求めた。これらの項目の因子的独立性と内の一貫性については、松井(1997b)が確認している( $\alpha$ 係数は.689-.810)。

3) 外向性の項目は、「話し好きな」「無口な(逆転)」「陽気な」「外向的な」「暗い(逆転)」「無愛想な(逆転)」、神経症傾向の項目は「悩みがちな」「不安になりやすい」「心配症な」「神経質な」「弱気になりやすい」「傷つきやすい」、開放性の項目は「独創的な」「興味の広い」「進歩的な」「好奇心が強い」「頭の回転が速い」「美的感覚の鋭い」、誠実性の項目は「いい加減な(逆転)」「几帳面な」「勤勉な」「成り行きまかせ(逆転)」「無精な(逆転)」「計画性のある」、調和性の項目は「穏和な」「短気な(逆転)」「怒りっぽい」「素直な」「親切的な」「協力的な」であった。

**公的自意識に関わる对人的欲求** 菅原(1986)が開発した賞賛獲得欲求尺度と拒否回避欲求尺度を使用した。賞賛獲得欲求は他者から賞賛を受けることを望む欲求で、拒否回避欲求は他者から拒否されることを恐れる欲求である。前尺度は5項目、後尺度は4項目で、基本的性格と同一の4件法で尋ねている。

**援助に関する規範意識** 松井(1992)が開発した援助に関する規範意識尺度から2種の個人規範意識尺度(援助的責任規範、非関与規範)を用いた。援助的責任規範は、苦境にある人や社会的に虐げられている人を援助しなければならないという規範意識で、非関与規範は他人のことには立ち入らない方がよいとする規範意識である。各尺度から5項目ずつを選び、基本的性格と同一の4件法で回答を求めた。

### 実施手順

1996年12月6日から同年12月22日にかけて、訪問留置・訪問回収法により、1000円の図書券を謝礼にして行った。調査機関及びレターヘッドは、(株)マーケティング・サービス社であった。

## 結 果

### 性・年代別に見た不思議現象の信奉

性・年代別に、12種的不思議現象を信じている比率をまとめたのが、Table 2 である。占い系の「占い」や「おまじない」は20代女性層を中心に女性において多く信じられており、疑似科学系の現象(「UFO」「超能力」)は、若い男性層で多く信じていた。50-60代の高齢層は、旧来宗教系の「神仏の存在」や「神社などのお守り」以外の不思議現象を、信じない傾向がみられた。

Table 2 の全体的傾向を把握するために、クロス表に基づくⅢ類(双対尺度法)を行った。解析結果を、Figure 1 に示す。Figure 1 の右側(I軸正領域)には疑似科学系現象が布置し、右側中央寄りには第4グループ現象(「霊」「死後の世界」「前世の存在」)が位置している。図左上(I軸負II軸正領域)には占い系の現象が、図左下(I軸負II軸負領域)には、旧来宗教系現象(「神社などのお守り」「神仏の存在」「タタリ」)が、それぞれ布置していた。さらに、疑似科学系には20代・30代・40代男性が、第4グループ現象には30代女性が、占い系には20代女性・40代女性が(「おまじない」「占い」は20代女性、「手相」「血液型性格判断」は40代女性)、旧来宗教系には50代・60代の男女が、それぞれ近傍に位置していた。

Table 2 性年齢別に見た不思議現象を信じる比率(単位%)

	N	U F O	占 い	霊	超 能 力	手 相	た た り	神 仏 の 存 在	前 世 の 存 在	お ま じ な い	血 液 型 判 断	神 社 お な 守 ど り	死 後 の 世 界
男性20代	111	36.0	12.6	33.3	19.8	6.3	11.7	20.7	18.0	4.5	18.9	15.3	19.8
男性30代	98	39.8	11.2	34.7	24.5	9.2	10.2	20.4	19.4	3.1	15.3	12.2	17.3
男性40代	126	26.2	4.8	27.8	21.4	13.5	9.5	19.8	15.9	4.0	21.4	15.9	15.1
男性50代	108	14.8	8.3	10.2	13.0	12.0	5.6	15.7	2.8	1.9	17.6	16.7	5.6
男性60代	58	8.6	10.3	17.2	10.3	15.5	6.9	37.9	12.1	5.2	15.5	19.0	8.6
女性20代	104	20.2	31.7	30.8	17.3	27.9	10.6	20.2	24.0	12.5	36.5	17.3	17.3
女性30代	95	23.2	10.5	30.5	18.9	14.7	4.2	22.1	22.1	6.3	22.1	15.8	13.7
女性40代	120	19.2	14.2	21.7	13.3	20.8	10.0	20.8	10.0	3.3	37.5	15.0	15.8
女性50代	112	9.8	13.4	16.1	4.5	17.9	8.0	29.5	9.8	2.7	30.4	23.2	8.9
女性60代	64	9.4	10.9	21.9	7.8	12.5	4.7	26.6	9.4	3.1	20.3	18.8	9.4

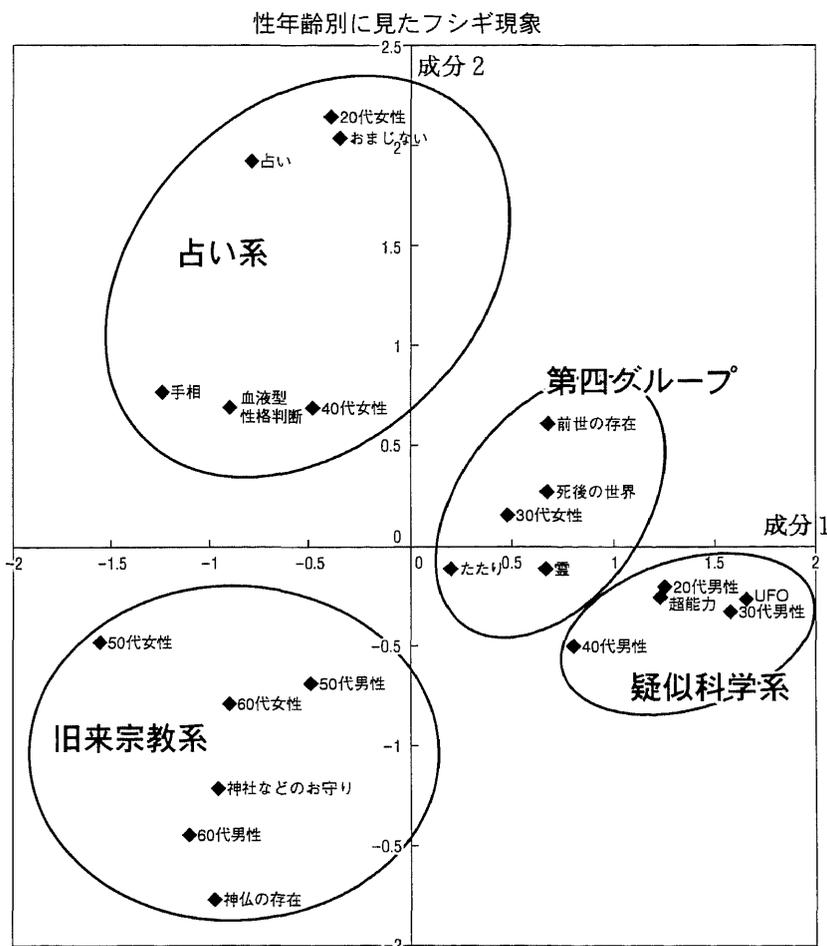


Fig. 1 性年齢別に見た不思議現象の信奉の構造



係数を示し、拒否回避欲求が負の係数を示していた。50-60代男性層では、外向性が有意な正の係数を示し、50-60代女性層ではいずれの変数も投入されなかった。

## 考 察

### 仮説の検証

性・年代別の不思議現象を信じる比率(Table 2)とクロス表に基づくⅢ類の結果(Table 3)をみると、20-30代の若い層は、男性は疑似科学系を信じ、女性は占い系を信じる傾向がそれぞれやや強いが、共に「霊」に代表される第4グループの不思議現象を多く信じていた。占い系に含まれる「手相」や「血液型性格判断」は40代女性層もやや多く信じていた。50-60代層は不思議現象を信じる比率が全般に低いが、「神仏の存在」や「神社のお守り」などの旧来宗教系不思議現象を、他層より多く信じていた。よって仮説1(性や年代によって信じる不思議現象が異なる)は支持された。

学歴は重回帰分析によって、不思議現象の信奉得点への影響を検討したが、有意な係数は得られなかった。従って仮説2(高学歴者ほど、不思議現象を信じない)は支持されなかった。不思議現象を信じる気持ちが学歴と関連していないという事実は、不思議現象への信奉が科学教育を受けてきた期間とは無関係であることを示唆している。

性・年代別に、基本的性格・公的自意識に関わる対人的欲求・援助に関する規範意識と、不思議現象の信奉得点との関連を分析したが、性・年代によって異なる影響がみられた。年齢を統制した偏相関分析では、男性において多くの変数が信奉得点と関連を示した。よって、仮説3(不思議現象を信じる度合いは、基本的性格や公的自意識に関わる対人的欲求と関連し、その関連は女性より男性において顕著である)は支持されたが、仮説4(援助に関する規範意識は、不思議現象を信じる度合いと関連する)は、一部しか支持されなかった。ただし、性・年代別の重回帰分析の結果は、不思議現象を信じる背景が、性・年代によって異なることを明らかにした。

## 結 論

首都圏に在住する成人の不思議現象の信じ方は、性・年代によって異なっていた。20代30代の若い層は、男性は疑似科学系、女性は占い系を信じるという差異はあるが、男女とも旧来宗教系以外の不思議現象を広く信じており、この信じる気持ちの背景に

は、神経症傾向と賞賛獲得欲求の影響がみられた。神経症傾向は、不安を感じやすい性格特性を意味し(脚注3の項目内容を参照)、賞賛獲得欲求は周囲の人から注目を浴びたり目立つことを望む欲求である。

一方、50代60代層は、伝統的な宗教に関連する現象を信じるが、全般に不思議現象を信じる気持ちは弱く、性格特性との関連も弱かった。中間世代となる40代層は、男性では神経症傾向の影響が認められたが、女性は援助規範や拒否回避欲求などが影響しており、これらの関連については、本研究のデータからは十全な考察を下すことができない。

以上のように、20-30代の若い人々が不思議現象を信じるのは、自身の不安を解消し、人から注目されたいという欲求に基づくものであると結論される。科学では説明できない諸現象を信じたり、占いなどに頼ることによって、生活上で感じるさまざまな不安を解消し、他人がもたない独自の意見を示すことによって、人から注目を浴びたいという心理が働いているものと推定される。

不思議現象の信奉の背後に不安が存在するという本研究の結論は、不思議現象に関する多くの評論(高橋, 1993など)や青少年を対象とした心理学的研究(汐見, 1988など)と整合している。人から注目されたいという欲求の影響は、美甘ほか(1992)と一致していた。ただし、これらの関連が20代30代層に限定されるという事実は、本研究独自の発見である。本研究は、従来の評論や青少年研究で指摘されてきた不思議現象を信じる心理を、成人の無作為抽出調査を通して分析した研究と位置づけられよう。

## 引用文献

- 井上順孝 1999 若者と現代宗教 ちくま新書  
 伊藤哲司 1996 いわゆる“非科学”への人々の傾斜に関する社会心理学的研究 文部省科学研究費補助金奨励研究(A)研究報告書  
 柿田陸夫・藤田 文 1992 霊・超能力と自己啓発 新日本出版社(新日本新書)  
 金児曉嗣 1997 日本人の宗教性 オカゲとタタリ  
 の社会心理学 新曜社  
 菊池 聡・谷口高士・宮元博章(編著) 1995 不思議現象なぜ信じるのか 北大路書房。  
 松井 豊 1992 大学生の援助に関する規範意識の検討(その3) 日本心理学会第56回大会発表論文集, 196。  
 松井 豊 1997a 高校生が不思議現象を信じる理由 菊池 聡・木下孝司(編) 不思議現象と教育

- 北大路書房 Pp.15-35.
- 松井 豊 1997b 無作為抽出標本に基づくBig Five尺度の検討1 日本心理学会第61回大会発表論文集, 33.
- 松井 豊 1998 フシギ現象への関心 広告月報, 1998年2月号, 46-51.
- 美甘早苗・大倉恭輔・宮司正男 1992 Paranormal Beliefと性格特性との関連 日本社会心理学会第33回大会発表論文集, 354-357.
- 中島定彦・佐藤達哉・渡邊芳之 1993 超自然現象信奉尺度の作成 *Journal of the Japan Skeptics*, 2, 69-80.
- 中村雅彦 1998 超常的信念を規定する社会心理的条件 渡辺恒夫・中村雅彦 オカルト流行の深層社会心理 ナカニシヤ出版 Pp.77-110.
- 中村希明 1993 靈感・霊能の心理学 朝日文庫
- NHK 世論調査部(編) 1984 日本人の宗教意識 日本放送出版協会
- NHK 世論調査部(編) 2000 現代日本人の意識構造 第五版 日本放送出版協会
- 岡本淑人 1988 迷信・格言への態度と行動 心理学研究, 59(2), 106-112.
- 奥田達也・伊藤哲司・河野和明・福地祐喜恵 1991 俗信についての心理学的アプローチ—興味><信念><行動>間の関連—日本グループダイナミックス学会 第39回大会発表論文集, 155-156.
- 菅原健介 1986 賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求—公的自意識の強い人に見られる2つの欲求について— 心理学研究, 57, 134-140.
- 汐見稔幸 1988 子供たちの「不思議大好き!」志向—非合理志向の調査から 子どものしあわせ(草土文化), 1988年11月臨時増刊号, 4-42.
- 高橋紳吾 1993 きつねつきの科学 講談社(ブルーバックス)
- 田丸敏高・今井八千代 1989 青年期の占い指向と不安 鳥取大学教育学部研究報告「教育科学」, 31(1), 225-259.
- Tobacyck, J.J. unpublished *A revised Paranormal Belief Scale*. Louisiana University, Unpublished manu script. 美甘他(1992)より引用.
- 戸田有一・南 耕治 1993 中学生の占い志向と自己効力 鳥取大学教育学部研究報告(教育科学), 35(2), 513-526.
- 上村 忠 1985 昭和60年はニューライフスタイル元年 月刊ブレーション(誠文堂新光社), 一九八五年三月号, 56-64.
- 和田さゆり 1996 性格特性用語を用いたBig Five尺度の作成 心理学研究, 67, 61-67.

—2000. 9. 29 受稿—